



令和4年度に引き続き、今年度も特別支援教育だより『Ciao!!』を発行することにしました。不定期の発行ですが、学校から御案内したいことや宇都宮市からお知らせがあった時などに発行したいと思います。

今回のお便りはNo.5です。昨年度1年間および前号の特別支援教育だよりNo.1～4は昭和小HPに掲載されております。お手すきの時にお目通しただけですと嬉しいです。

QRコードはこちらです👉



保護者の皆様と学校がよりよい関係で学びあうことにより、信頼関係が築かれていきます。子育てのパートナーとして、お子様の将来をともに支えていけるようお互いの立場を理解し合い、お子様のためによい方法をともに考えてまいります。学校と家庭が「いっしょに」を合言葉に、よりよく連携していけたらと思います。

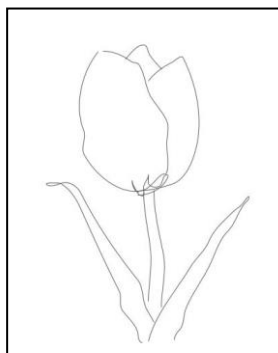


## 当たり前のことってなあに？

当たり前のこととは何でしょうか。普通って何でしょうか。自分の中での当たり前が普通なのでしょうか。みんなと同じようにできることが普通？なのでしょう。学校教育を推進する上で欠かせないのが“お互いを理解すること”です。

下の図のような、おはなのぬり絵をします。ある先生が言います。

『みなさん、この花を、「しのめ色」で塗りましょう。それとも「えんたん色」がいいですか。やはり「なでしこ色」で塗ることにしましょうか。好きな色でいいですよ。』



『「がくが花弁化した部位」は「ピーコックグリーン」にしますか。それとも、「テールグリーン」にしますか。あなたの好きな方でいいですよ。』

・・・えーっ？どうしてそれがいいのですか？』

みなさんは「」内の色が、どんな色かはっきりとイメージできたでしょうか。頭の中でイメ

ージできないものを選んだり、どうすればいいかわからない状態で「好きな方でいいですよ。」と言われたりしても、答えは出せないのです。

慣れない場面や、言葉だけをずらーっと並べただけの指示では、次に何をしたらいいかわからない子もいます。

合理的配慮のひとつとして、実物や実際に使う用具を見せたり、写真やPCの画像などで見本を見せてあげたりして「視覚的な支援」をすると分かりやすくなる場合もあります。

同じ社会で共に生きていくためには、お互いを理解し合うことが大切です。生まれも育ちも違うし、生活経験もそれぞれ幅がある小学生時代です。わからないことは当たり前。わたしの当たり前はとりにいる人の当たり前ではないのかもしれない。

みんなの当たり前を擦り合わせられる、間違いや、わからないことを責めずにうまくピックアップしてあげられるようなやさしい雰囲気づくりに努めたいものです。

保護者はだれよりも一番に、お子さんの幸せを考えます。特定の学習が困難、一斉指導が通りにくい、集団行動がとりづらい、情緒が不安定、不登

校傾向、その子なりの困り感に合わせた工夫のもとで、その子なりの取組ができ、お子さんが幸せに安心して学校生活を送ることができる、そんな取

組のあれこれを、少しずつお伝えしていけたらと思っています。

## あなたにも“こだわり”がありますか？

わたしが担任したある男の子の話です。そのお子さんは今ではもう就職していて立派な大人です。子供が生まれたとの知らせが年賀状であり、感動したものです。

その子は悲しい事や気に入らないことがあると、いつも決まって教室の片隅に設けておいた空間に身を寄せました。ちまたでは、『クールダウン』や『クワイエットタイム』と呼ばれているものです。

その子は、暗いところから差し込む日光の一筋の光が大好きでした。段ボール箱で作った秘密基地をととても気に入っていました。どうしても興奮が冷めやらない時は、大好きな心を落ち着けることができる特別な場所で、自分なりに気持ちを切り替えて、また出勤する気持ちを整えたのです。

『クワイエットタイム』とは聞きなれない言葉ですが、子育てでも、保護者の方が自然と取り入れていることではないでしょうか。『クワイエットタイム』とは、問題行動が起きた場所から少し離れて、静かに過ごせるように指示し、環境を整え、短時間の静かな時間を過ごして、元の活動に戻るように促す時間・流れの事です。

このようなやり方が一般的に広まれば、家庭のみならず学校や買い物先でも過ごしやすくなると思われます。みなさまも子育ての合間に、同じような経験はございませんか。



前述したお子さんには、強いこだわりがありました。色です。何にでも緑色が入っているものを選ばないと気が済みません。画用紙も、ハンカチも、靴のラインも、筆箱も…。絶対に譲れません。少しでも気に入らないとかんしゃくを起こしていました。そのお子さんから、私も「まあいいか。」と、許容範囲を広くすることを教えてもらいました。マニュアル通りに進めることだけが授業、学校生活ではないと気づかされたのです。そのお子さんに出会ってから、私の教師感は大大きく変わりました。その子との出会いのおかげで、私は自分から希望して特別支援学級を担任することになったと言っても過言ではありません。

ひとりひとりのお子さんの特性をよく見極め、堅く真面目に考えすぎず、時には「まあいいか。」と許容範囲を広くしなければならぬと毎日学ばせていただいております。

「学校と家庭がいっしょに」を合言葉に、よりよく連携していけたらと思います。保護者の皆様と学校がよりよい関係で学び合うことにより、信頼関係が築かれていきます。子育てのパートナーとして、お子様の将来を共に支えていけるようお互いの立場を理解し合い、お子様のためによい方法を一緒に考えてまいります。

